スタンダール　秋山晴夫 訳

# パルムの僧院

世界名作全集　5　　筑摩書房

世界名作全集　5
パルムの僧院

昭和35年4月25日　初版発行
※　定価　240円
訳者　秋山晴夫
発行者　古田晁
東京都千代田区神田小川町2—8
株式会社　筑摩書房

© 1960

# 目次

パルムの僧院

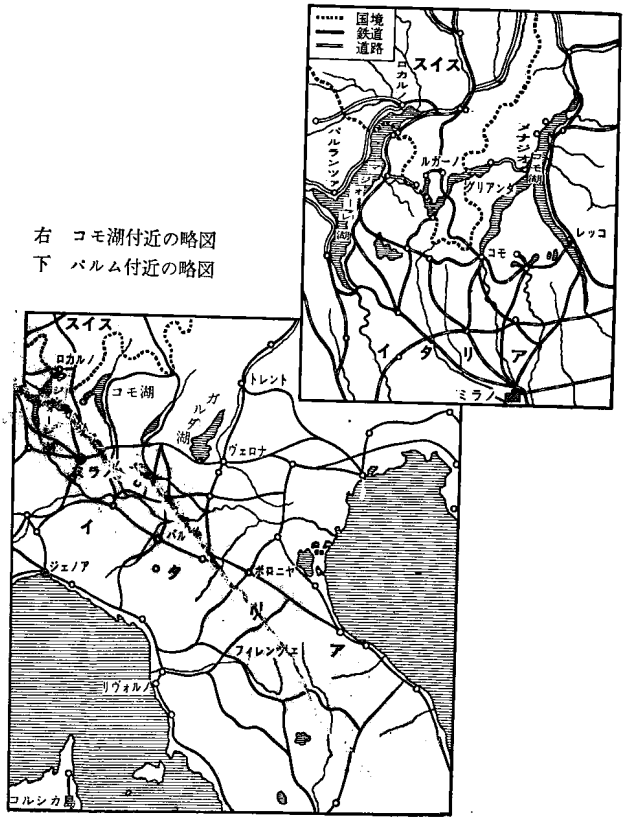
序……三
上巻……五
下巻……二七
注……四三一
解説……四五九

山本健吉

# ハルムの僧院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

右　コモ湖付近の略図
下　パルム付近の略図



# 序

この物語は一八三〇年の冬、パリから三百里はなれた土地で書かれた。したがって、一八三九年の世相を諷する意図はもとよりない。

その一八三〇年にもだいぶ間のある時代で、我が軍がまだヨーロッパを駈けめぐっていたころのこと、私はたまたま宿舎票にある司教会員の家を割当てられたことがあった。ところはパドヴァというイタリアの、まことに居心地よい町だった。滞留はながびき、私たちは親しい仲になった。

一八三〇年の末ごろ、再びパドヴァを通ったので、私はさっそくその人のよい司教会員の家にはせつけた。当人のすでに物故したことは知っていたが、かつて毎日たのしい夜を過したサロンが、その後も折にふれてなつかしく思い出されていたので、ぜひもう一度見たいと思ったわけだ。家には司教会員の甥とその夫人がいた。二人は私を旧知のように迎えてくれた。そこへ二、三人の客も来合せて、いとまはだいぶおそくなった。甥はカフェ・ペドロティからすばらしいザンバジョン酒*をとりよせてくれたりした。実をいうと私たちが夜ふかしをしたのは、誰かの談がたまたまサンセヴェリーナ公爵夫人のことに触れ、甥が私にそのくわしい話をして聞かせたためだった。

「私がこれから行く国には」と私は友だちに言った。「とてもお宅のようなところはありませんから、夜長のつれづれに、今夜うかがったサンセヴェリーナ公爵夫人の生涯を物語にでも書いてみようかと思います」

「それでしたら」と甥は言った。「伯父の書いた年代記をお貸ししましょう。パルムの項には公爵夫人全盛時代の宮廷の陰謀がいくらか記されてあります。ですが、注意なさるんですね。この話はいっこう道徳的じゃありませんよ。このごろのフランスではみなさん福音書的な潔白を自負されている際ですから、たちまち暗殺者のそしりを受けかねませんからね」

私は一八三〇年の原稿のままこの物語を発表する。それには、次のような二つの不都合を免れ得ない。

第一は読者のためだ。人物がみなイタリア人ばかりだから興味は少ないだろう。この国の人たちの心はフランス人の心とはよほど違っている。イタリア人は真摯で、善良で、かつ物に動じない。思うことは何でも口にす

る。虚栄心はあっても一時の発作に過ぎず、虚栄すなわち情熱となり、Puntiglio*と呼ばれるところのものになる。また貧乏も彼らのあいだではけっして物笑いの種にはならない。

第二の不都合は作者に関する。

あからさまに言って、私は人物の性格を荒削りのままにしておく大胆さを敢えてした。そのかわり、彼らの多くの行為にたいしては、もっとも道徳的な非難を加えてはばからない者であることをここに明言しておく。金銭を何よりも愛し、憎しみや恋のために罪を犯すことの断じてないフランス人の性格にみるあの高い道徳性や優雅さを、彼らイタリア人に与えたところでどうなろう。この物語のイタリア人はまったく趣を異にしている。ともあれ私には、南から北に向けて二百里を進むごとに、風景も物語も一新してしかるべきだと考えられる。司教会員のしとやかな姪は、サンセヴェリーナ公爵夫人とは知り合いの仲で、ふかく夫人を愛していた。その姪からも、夫人の起した波瀾はもとより非難すべきものだが、しかし歪曲はいっさい加えないでいただきたいという依頼があった。

一八三九年一月二十三日

# 上巻

楽しい土地は、かつて私に物書かす
優しい誘いだった。*

アリオスト（風刺詩　第四）

## 第一章

### 一七九六年のミラノ

一七九六年五月十五日、ボナパルト将軍は血気にはやる軍隊の先頭に立ってミラノへ入城した。それはロジ橋*を乗り越えて、シーザーとアレクサンダーがようやく今日その後継者を得たことを世に知らしめたばかりの軍隊だった。イタリアが数カ月のあいだに目撃した豪胆と天才の奇蹟は、眠っていた人たちの眼をさまさした。フランス軍の到着する一週間前までは、ミラノの市民たちはフランス軍など、皇帝陛下の軍隊の前にはひとたまりもなく潰走する烏合の衆だとばかり思っていた。少くも、うす汚い紙に刷った掌ほどの小新聞などは、毎週三回はそれを市民たちに繰り返していた。

中世のころには、共和主義的なロンバルジア人は、フランス人と同じように勇敢だった。その結果は、ドイツ皇帝たちのために全都が破壊しつくされるのを、その眼で見なければならない仕儀になった。忠誠なる臣民となってからは、彼らの大事業は、貴族や金持の娘が結婚するとき、バラ色の琥珀地の小さなハンカチに小唄を刷りこむことぐらいのものだった。その若い娘も一生一度のたいせつな時期を二、三年も過ぎると、さっそく忠実な騎士を選ぶ。時には婚家で選んだ扈従騎士の名前が婚姻契約書に名誉ある場所を占めることもあった。思いもかけないフランス軍の到着が与えた深刻な動揺は、このような柔弱な風習とはおよそ縁が遠かった。かくて、まもなく新しい熱情的な風習が現れた。一七九六年五月十五日をもって人々はみな、これまで尊敬してきたものが実は滑稽至極な、また時に憎悪すべきものであることに気づいた。オーストリアの最後の連隊が撤退してしまうと、旧思想は地におちて、命を賭けることがはやりになった。偽善と気の抜けた感動の幾世紀を経た今日、仕合

せになるためには真の情熱をもって祖国を愛し、場合によっては命をも賭けねばならないことを知った。シャルル・カンとフィリップ二世の翼々たる専制がつづいたため、ロンバルジア人は深夜の闇の中にあったのだ。今や彼らはその偶像を打ち倒して、たちまち光明のあふれかえる中にある思いだった。五十年この方、フランスで「百科全書学者」やヴォルテールが活動をはじめて以来、僧侶たちはミラノの善良な市民に向って、読書や世の中のことを覚えるのは何の益もないことだ、そんなことより司祭に割賦金をちゃんちゃん納めて、どんな小さな罪でも正直に告白していれば、やがて天国へいってよい場所を与えられることはまず間違いないと呼びかけていた。昔はこれでなかなか手ごわい市民だったが、オーストリアもまた彼らの気力を根こそぎにしようとして、その軍隊に新兵を供給せずにすむ特権を、大安売りに売りつけてやるのだった。

一七九六年のミラノの軍隊は赤い服を着た二十四人の下僕風情からなり、ハンガリアの立派な擲弾兵四個連隊といっしょにこの都市を守っていた。風儀の頽廃は極端で、しかも熱情ははなはだ稀れだった。この世でさえなお土砂をかけられないためには、司祭に何もかもしゃべらねばならない不愉快をしのんだばかりか、ミラノの善良な市民たちは、君主政治の煩瑣な桎梏をまだいくつか負わされていた。これには実にいやな思いをさせられた。たとえばミラノに駐屯して従兄の皇帝の名において統治をしていた大公*が、小麦の取引をやろうと商売気を出したのはよかったが、その結果、殿下がお倉をいっぱいにするまでは、百姓どもは手持ちの穀物を売ることをいっさい禁じられた。

一七九六年の五月、フランス軍が入城して三日目のことだ。セルヴィというカフェで（当時はやっていた）、軍隊についてきたグロ**という頭の少し変な――その後有名になった男だが、その若い密画の絵かきが、さらでだに太鼓腹の大公についていろいろと功績を聞かされると、黄色い粗末な紙にアイスクリームの目録を刷った貼紙をふととって、でっぷりと肥った大公の似姿を描きとばしたものだ。フランスの兵隊がその腹に銃剣を突きさして、血の代りにおびただしい小麦が流れ出している図だ。冗談とか風刺画とかいうものは、この疑り深い専制の国ではいっこうに知られていなかった。カフェ・セルヴィのテーブルにグロが置いていったデッサンは、さながら天から降った奇蹟だった。絵はその晩の中に版画になって、翌日は二万枚も売りつくされた。

その日は六百万という戦費賠償金の告知が貼出され

た。それは六回の戦いに勝ち、二十の地方を征服して来たものの、靴とズボンと上衣と帽子に事欠いていたフランス軍の費用に当てられる金だった。

そんな窮乏したフランス軍隊といっしょに、ロンバルジアに侵入してきた幸福と歓喜はまた非常なもので、この六百万という賠償金はそのあとからもじき続々と追徴はあったけれど、ともかくも、その不当に気のついた者はわずかに坊さんたちと、それに二、三の貴族だけだった。当のフランスの兵隊たちは一日笑ったり歌ったりしていた。みんな二十五歳未満で、二十七歳の司令官が全軍の最年長者ということになっていた。その陽気さ、若さ、無頓着さ加減は、六カ月以来神聖な説教壇の上から、フランス軍は悪魔だ、彼らはあらゆるものを焼きつくし、一人残らず首をはねることを命じられている、聞かねば自分が死刑だ、だからどの連隊も断頭台を先頭に押し立てて進軍している、と説きたてた坊さんたちの怒りを帯びた説教とはまことに滑稽な対照だった。

ところがどうだろう、田舎ではそのフランス兵が藁屋の戸口に立って、家の内儀さんの赤子を両手で揺っているところをよく見かけたものだ。またほとんど毎晩のように、誰かしら鼓手がヴァイオリンを弾いて、即席の舞踏会を開いていた。もっともコントル・ダンスなどは兵隊たちにはあまり高尚で複雑だったから、もとよりそんなものは知っていようもなく、土地の女たちに教えてやるわけにもゆかなかったので、かえって女たちの方からモンフェリータとかソートゥーズとか、そのほかいろいろなイタリアの踊りをフランスの若者たちに教えてやっていた。

士官たちはできるだけ金持の家に宿泊した。英気を養う必要が大いにあったわけだ。たとえばロベールという一中尉はデル・ドンゴ侯爵夫人邸の宿舎票を手に入れた。この士官などは相当機敏な若い徴発家だったが、それでも屋敷へはいった時はピアチェンツァで受取ったばかりの六フランがやっと全財産だった。ロジ橋を渡ってから、弾丸でやられたオーストリアの立派な士官から新調のすばらしい南京地のズボンを剝いだが、これほどうまいときに衣服にありつけたことはかつてなかった。士官の肩章は毛織の切れだし、ラシャの上着は、ぼろがとんでしまわないように袖を裏地に縫いつけてあった。それはまだしも、靴の底が、これもロジ橋の向うの戦場で拾った帽子の切れ端で修理してあるのは、いかにもみじめだった。この即製の靴底がまたばかに目立つ紐で靴の上側に結えつけてあることだ。家令がロベール中尉の部屋へやってきて、侯爵夫人と晩餐を共にして頂きたいと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

告げたときには、さすがの中尉も途方に暮れてしまった。部下と彼とは宿命的な晩餐までの二時間を、少しばかり上着を縫い直してみたり、靴のやっかいな紐をインクで黒く染めたりして過ごした。恐ろしい時はついにやってきた。「あとにもさきにもあれぐらいまいったことはないよ」とロベール中尉はよく私に言ったものだ。「夫人たちは僕がなにかこわいことでもはじめるかとびくついているし、僕は僕でなおさらびくびくなんだからね。僕は靴をみつめていたよ。どうしたら品よく歩けるか、見当がつかないのだ。それにデル・ドンゴ侯爵夫人は」と彼はつづけるのだった。「なにしろ当時花の真盛りだったからね。君も知っているとおり、あのすばらしい眼、この世のものとも思われない優しさ、濃いブロンドのきれいな髪が、あの愛らしい顔を瓜実顔に浮き立たせているのだ。僕の部屋には、レオナルド・ダ・ヴィンチのエロディアードがあったが、夫人の顔にそっくりさ。神様のおぼしめしだ、僕は超自然の美に打たれて自分の恰好など忘れてしまった。何をいうにも二年この方ジェノアの山の中で、醜悪なもの悲惨なものしか見ていなかったのだからね。僕はそのうっとりとした気持を二言三言思い切って夫人に話しかけてみたものだ。

しかし僕だってそういつまでもお世辞ばかり並べている程ぼんやりじゃなかった。僕は話題を変えながら、大理石ずくめの食堂に侍っている十二人の従僕と給仕に眼をやった。その時の僕にはまったく燦然たる身づくろいだ。やつらは立派な靴をはいているばかりか、銀の留金までつけているじゃないか。僕は眼の隅でやつらのあっけにとられた視線が、僕の服の上、いや恐らく靴の上にまでとまっているのを気づいていた。これには胸をえぐられる思いだったよ。それは無論、ただの一言であいつらを慄えあがらせることはできたろうよ。しかしご婦人たちの胆をつぶさずにとなると、これはむずかしい。実はちょうどそのころ、侯爵夫人が修道院にいた侯爵の妹を呼び寄せていたのだ。あとから何度もきかされたところによると、夫人が自分に少し勇気をつけようと思ったのだそうだ。ジーナ・デル・ドンゴといって、後でピエトラネーラ伯爵のみめ麗わしい奥方になられた人だ。順境にあってその明朗可憐さに及ぶものなく、また逆境にあってはその勇気と落着きぶりにだれ及ぶもののない人さ。

ジーナはそのとき十三ぐらいだったが、十八には見えた。元気のいい発剌とした娘さんだった。こいつは君も知っているとおりだ。このご当人も僕の身支度には、つい噴き出しはしないかと大心配で物も食べないありさ

ま。ところが侯爵夫人の方はまるで反対で、うんざりするほど丁重を極めている。僕の閉口していることはちゃんと眼の中に読みとっているのさ。要するに僕はとんだ阿呆の役をつとめていたわけだ。軽蔑を嚙みしめていたのだ。こいつはフランス人にはできない芸当だそうだ。するうち、天意とでも言いたい名案がぴかっと浮んできた。そのご婦人連に僕のみじめさ加減をぶちまけにかかったわけだ。老いぼれの馬鹿な将軍たちに、ジェノア地方の山の中に二年間も閉じこめられて、どんな目にあったかという次第もね。『あそこでは、地方に通用もしないアシニャ紙幣*を渡されますし、パンは日にたった三オンスでした』とこんな調子だ。ものの二分もしゃべらないうちに、善良な侯爵夫人はもう眼に涙をいっぱいためているし、ジーナのほうも真剣な顔をしている。

『まあ、中尉さん、パンが三オンスですって？』ときた。

『そうですよ、お嬢さん。もっともその代り週に三度は欠配でしたがね。それに私たちの宿泊していた百姓は、私たちよりもまだ惨めだったものですから、そのパンを少しずつ分けてやっておりました』

晩餐が終ると僕は侯爵夫人に腕をかしてサロンの入口まで行き、それから急いで引きかえして、僕の給仕をしてくれた召使にたった一枚きりの例の六フランのエキュー銀貨をくれてやってしまった。何に使おうかと夢を描いていたやつだ」

「一週間ほどして」とロベールは話しつづけた。「フランス軍が誰も断頭台になどかけないことがわかると、デル・ドンゴ侯爵はコモ湖畔のグリアンタの城からもどってきた。フランス軍が近づくと、あの若くてきれいな夫人や妹を戦争の渦中に放り出したまま、勇敢な逃避行をきめこんでいたわけだ。侯爵の我々に対する憎悪はその恐怖感にも匹敵するくらいで、つまるところ測り知れなかった。僕に慇懃をつくして見せる時の青ぶくれの敬虔な顔つきときたらとんだ見ものだったよ。侯爵がミラノに帰ってきた翌日、六百万の賠償の分配として、ラシャ三オーヌと金を二百フラン受取って、やっと僕も持ち直したものだ。舞踏会もはじまったので、さっそくこのご婦人方の騎士に収まったよ」

このロベール中尉の話はとりも直さずフランス兵すべてのそれであった。正直な兵隊たちは、貧乏を軽蔑されるどころか、かえって同情され、親しみをもたれたのだった。

ただしこの思いがけない幸福と陶酔は、わずかに二年つづいただけだった。その間の狂態ぶりは誰彼といわず大変なもので、これが説明となると、百年以来ここの民

衆は退屈しきっていたのだという深遠な歴史的考察によるのほかない。

昔はヴィスコンチ家*とかスフォルツァ家とかいう有名なミラノ公の宮廷では、南国に特有の情熱があふれかえっていたものだが、一六三五年**スペイン人がミラノ人を征服して、陰気で疑い深くて、傲慢で、ただもう反逆ばかり恐れている主権者として君臨してからは、その明朗さは影をひそめてしまった。人民は主権者たちの風習をまねて、現在の享楽よりも、些細な侮辱に対してさえ匕首をふるって復讐することを考えた。

しかるにフランス軍がミラノに入城した一七九六年五月十五日から、カッサノの戦いでその軍隊が追い出されるに至った一七九九年四月までは、ただもう歓喜の羽目を外してお祭りさわぎや遊蕩三昧、陰気なことはおろか分別くさいというだけのことでもきれいに忘れてしまって、この休戦期間は、苦虫をかみつぶしたり金儲けをすることを忘れていた老人の豪商や、高利貸や、公証人さえ、何人か数えることができたほどだった。

せいぜい上流貴族に属する家族が二、三、世の朗かさ陽気さにすねて見せたかのように、田舎の屋敷へ引込んだだけで、そういう貴族の富裕家庭は、フランス軍のために要求された賠償金の割当に際して、他としたたかな区別を受けたことはことわるまでもない。

デル・ドンゴ侯爵はこの馬鹿陽気に腹を立てて、コモ湖の向う、グリアンタの城へまっ先に逃げ出した一人だった。その城へは婦人たちもロベール中尉を案内したことがあった。位置からいったら世界にもおそらく類がなかったろう。崇高な湖水の水面から百五十尺の平原にあって、そのほとんど全貌を見下ろし、昔は城塞だったところだ。至るところの大理石が紋章入りであることでもわかるとおり、デル・ドンゴ家が十五世紀に建てたものだった。今でもまだ跳ね橋や、水こそないが深い堀なども残っていた。ことにこの城は高さ八十尺、厚さ六尺の城壁を囲らして、奇襲の備えは固かった。この城が猜疑心の強い侯爵に貴重なゆえんもそこにある。二十五人から三十人の家僕にとりまかれて、しかも彼らに口をきくのは怒鳴りつけるときだけ、またそれ故にこそ家僕らは自分に忠実だと思いこんでいるのであるから、ミラノにいるよりよっぽど心配は少くてすんだ。

もっともこの恐怖心は全然根拠がないわけではなかった。それというのもオーストリアが戦場の捕虜を逃がすために、グリアンタから三里のスイスの国境に置いていた間諜と積極的に連絡していたからで、万が一露見したらフランスの将軍たちから由々しい眼で見られたことだ

ろう。

侯爵は若い夫人をミラノに置いて行ったので、夫人は家事いっさいの切り盛りにあたり、土地でいうところの『デル・ドンゴ家』に課せられた賠償金の処理も自らしなければならなかった。夫人は割当を軽くしてもらうことに奔走していた。そのためには公職を引受けている貴族はもとより、時には貴族でない有力者にも会わねばならなかった。そこへ一家の重大事が起った。侯爵は妹のジーナを金もあり門閥もすぐれたある人物と結婚させようと考えていたところ、当の相手が頭髪に粉を振りかけている態の男だったので、ジーナは当人に会った席で噴き出してしまう始末。おまけに、ピエトラネーラ伯爵とさっさと結婚してしまった。実際のところ、伯爵はなかなか立派な人物で、人柄もまことによくできた男だったが、ただ親子相次いで産を傾け、しかも一番困ったことに、新思想の熱烈な味方だった。その上、ピエトラネーラはイタリア国民軍*の少尉だった。そのことはいよいよ侯爵を絶望させた。

この狂態と幸福の二年間が過ぎると、パリの執政官政府はすでに確立した主権者であるかのような顔をして、凡庸ならざるものいっさいに対し不倶戴天の憎悪を示しはじめた。その政府がイタリアに送った無能な将軍たちは、二年前のアルコーレやロナートの偉業の証人であるヴェローナのその同じ平原に、相次いで敗戦を繰り返した。オーストリア軍はまたミラノに近づいてきた。当時大隊長だったロベール中尉はカッサノの戦いで負傷して、友なるデル・ドンゴ侯爵夫人の許へ最後の宿泊にやってきた。別れは悲しかった。ロベールはノヴィ*へ退去する軍隊について行くピエトラネーラ伯爵といっしょに出発した。若い伯爵夫人は、兄が遺産の分前を渡すことを拒んだので、荷車に乗って軍の後を追った。

かくて反動と旧思想への逆戻りの時代が始まった。ミラノ人がいうところの itredici mesi（十三カ月）である。幸いにもこの愚劣への逆戻りが、マレンゴの戦***いまで十三カ月しかつづかなかったためだ。古いもの、敬虔なもの、陰気くさいものがまたいっさい万端の先頭につき、社会の指導権を再び握ってしまった。やがて、この結構な主義に依然として忠実な連中は、いかにも当然のことながら、ナポレオンがエジプトでマメルク***に吊し首にされた、と村々に発表した。

領地に引込んですねていた人たちは、復讐の念に燃えながら戻ってきた。その一人であるデル・ドンゴ侯爵の憤怒はひときわ激しかった。大げさな憤激は自然と彼を一派の首領に押し上げていた。この連中は恐怖のない時

は至極正直な人たちだったが、何をいうにもいつもびくびくもので、オーストリア軍の司令官をついに籠絡(ろうらく)してしまった。根がお人よしの司令官は、厳格こそ最上の政策であると説きつけられ、さっそく百五十人の愛国者を逮捕させた。彼らこそ当時のイタリアにおける最もましな人たちだったのだ。

間もなく彼らは『カッタロ河口』*へ流されて地下の洞窟に放りこまれた。湿気と、ことにパンの欠乏は、これらの悪党を残らず適切迅速に裁いてしまった。

デル・ドンゴ侯爵は枢要な地位を占めた。とんだ美質を豊富に備えた上に吝嗇(りんしょく)ときていたから、妹に一エキューも送ってやらないことを自慢していた。相変らずの恋ぐるいでどうしても亭主を離れようとしないから、いずれはフランスで男とのたれ死するだろうというつもりだった。人のいい侯爵夫人はすっかり絶望していたが、それでもついに自分の手箱の中から、二つ三つの小さなダイヤモンドを盗み出すことに成功した。夫が毎晩彼女からとりあげては、鉄の箱に入れて寝床の下へしまいこんでいたのだ。侯爵夫人は持参金として夫の許へ八十万フランを持ってきていたが、月々小遣として八十フランずつ受取っていた。フランス軍がミラノを退いていた十三カ月のあいだ、この小心な婦人は何かと口実を設けて、どうしても黒服を脱がなかった。

さて作者は実をいうと、われわれの主人公の物語をはじめるについて、多くの大作家にまね、その生れる一年前からはじめたわけである。その主要人物というのは、実はミラノでデル・ドンゴ小侯爵(マルケイ)*と呼んでいるファブリス・ヴァルセルラその人で、彼はちょうどフランス軍が撃退されたそのときにこの世に生れ出た。青ぶくれの大きな顔、作り笑い、新思想への限りない憎悪、諸君もご承知の例の大領主デル・ドンゴ侯爵の次男としてたまたまこの世に生をうけたわけだ。一家の財産は挙げて父親生きうつしの長子アスカニオ・デル・ドンゴが相続することになっていた。長子が八歳、ファブリスが二歳のとき、名門の人たちがとっくに吊し首になったとばかり思っていたボナパルト将軍が、突然サン・ベルナール山***を下りてきて、ミラノに入城した。このときもやはり歴史に類のない時だった。民衆は挙げていかに熱狂したか、想像してもいただきたい。数日にしてナポレオンはマレンゴの戦いに勝った。あとはいう必要もない。ミラノ人の歓喜は絶頂に達した。もっとも今度のそれには復讐の気持もまじっていた。この善良な市民たちは、すでに憎悪を教えこまれていたのだ。まもなくカッタロの河口に流されていた愛国者たちの生き残りが戻ってきた。彼ら

の帰還は国民祭をもって祝われた。彼らの青ざめた顔、きょとんとした大きな眼、やせほそった手足は、八方からわき起る歓声とは実に奇妙な対照だった。彼らの到着は最も危険にある家族たちの出発の合図であった。デル・ドンゴ侯爵はグリアンタの城へイの一番に逃げ出したひとりだった。貴族の家長たちは憎悪と恐怖でいっぱいなのに、夫人や令嬢たちは、フランス軍が初めて来た当時の楽しさを思い出して、ミラノの町や、マレンゴの戦いのあとじきに『カーサ・タンツィ』で催された陽気な舞踏会をしきりになつかしがった。戦勝後数日にして、ロンバルジアの治安維持に任じられたフランスの将軍は、貴族の小作人や田舎の婆さんたちがみな、イタリアの運命を一転させて、一日のうちに十三の要塞を取戻したマレンゴのこの驚異的な戦勝のことなどさらに念頭になくただもうプレシア第一の守護神であるジオヴィタの予言に気をうばわれているのを認めた。そのご託宣によると、フランス軍とナポレオンの繁栄は、マレンゴの戦いのちょうど十三週間後に終りを告げるというのだ。デル・ドンゴ侯爵をはじめ、田舎にいる不平貴族たちのいくらかでも弁解になる点は、彼らはこの予言を冗談でなしに、本気で信じていたということだった。こういう人たちは、揃いもそろって一生に四冊と本を読んでいなかった。彼らは十三週間の後にミラノへ帰る準備を公然とやっていた。しかし時の経つにつれて、フランスのため新たな成功が収められていった。パリに帰ったナポレオンは、さきにマレンゴの一戦で外敵からよく革命を救ったと同じように、賢明な命令によってよくまた国内の革命をも救った。こうなると城に逃げていたロンバルジアの貴族たちはプレシアの聖なる守護神の予言を初めから誤解していたことに気がついた。十三週間ではなくて、十三カ月だというのだ。十三カ月が終った。フランスの繁栄は日ましに大きくなってゆくらしかった。

一八〇〇年から一八一〇年に至る進歩と幸福の十年間については、簡単に述べることにする。ファブリスは幼年時代をグリアンタの城で過した。村の百姓の子供たちにまじって、殴ったり殴られたりしていたわけだ。物はなに一つ教えられなかった。読むことさえ彼は習わなかった。その後ミラノのイエスイタ派の学校に入れられた。父侯爵の要求は、ラテン語を教えてもらいたいが、それには共和国のことばかり説く古くさい書物でなしに、十七世紀の芸術家たちの傑作が百枚以上も挿絵にはいっている豪華な本でやってもらいたいということだった。その本とはパルムの大司教だったファブリス・デル・ドンゴが一六五〇年に上梓した、デル・ドンゴ侯ヴァル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb